Osaka University Knowledge Archive

Title	『能古』の時代
Author(s)	八木, 毅
Citation	語文. 1990, 55, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68816
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

追悼小島吉雄先生

『能古』の時代

八木　毅

小島先生を偲ぶ一文となると私には標題に掲げたやうなことになる。私は中学時代に懐徳堂へ経書の素読に通ったりしたこともあって、漢学塾の二松学舎へ進学した。真珠湾の翌年は卒業年次になってゐた。その年、私は敬慕してゐた塩田良平・森本治吉の両先生から「高木市之助の居られる九大を受けて、も少し勉強するやうに」と勧めて頂き、九州大学に一九四二年四月入学した。開講後、当時助教授でゐらした小島先生の講筵につらなり、始めて先生の声咳に接しえたのである。『能古』には九大時代の先生の学問やその他の御様子が窺へて興味深い。私が先生からうけたのは、近世文学後景論や西鶴町人物講読や連句の演習などであった。先生は、「唯野教授」と違って、二十分は遅く始まり、三十分延長されることがしばしばあった。新古今和歌集の研究を纏められつつあった先生は、演習で学生の発表中は大体眠っておられて、終はる前には目覚めて多分予定されてゐた質問をされるので、こちらは油断禁物だった。

九大で二年次の十二月、私達は兵役にかりたてられ、北海道から復員して帰ってみると何と卒業証書が届いてゐた。大阪の廃墟の街を徘徊してゐる頃、法文学部が大阪大学に設置され、小島先生はその国文学科創設者に内定、先生御赴任の五ケ月前に「助手にきて手伝へ」と仰言って頂いたので、私は勤め始めたばかりの神戸女学院中高部を一年半で辞した。そして、旧浪高校舎二階の国文学研究室で、博多からの小島指令に従った頴原文庫の受入れや、中尾松泉堂・杉本梁江堂・沖森書店などとの付合ひが始まった。御郷里に帰られた小島先生は、淀川筋の変貌を御覧になって、その頃の心境を「わたくしの古里は、大阪府下の北河内郡で、寝屋川のほとりにある秦（はだ）といふ一農村部落である。終戦後わたくしは此の古里に帰り住んでゐる。この村は戦時中に町になり、そして、今年の五月には寝屋川市になった。今の寝屋川市は、幼い頃に味はったやうな美しい詩を求めるよすがもなく、恐ろしく散文化してしまってゐる家が建ち並んだから、今日のこのごろでは、次田の灯もわが家からは見ることが出来ない。寝屋川堤松並木もとうの昔に伐り払はれてしまってゐる」（『能古』）と述べ、嘆いてをられる。私が学問上あれこれの御指導を先生から授かったのは、実に、助手の十年間であった。阪大から名古屋へ移ることを決めて下さったのも小島先生であったし、私は再び敬愛する高木市之助先生の膝下にあって、高

木先生が創設せられた大学に勤めさせて頂けて幸せであった。名古屋にきて三年目に朝日新聞夕刊の「私の先生」といふ連載企画へ寄稿依頼をうけた私は、迷ふことなく小島先生を書かせて頂いた。その拙文が『能古』に収載されてあるのを見て、私はびっくりした。その文章の中に、「大地主の一人息子として気ままに育たれ…」と私が書いた部分が何と「田舎の小地主」と先生の手によって改められてゐたのには、さすがの私も参ったが、改竄された先生のお気持ちが余りにもよく分かって、何も申上げられないままに先生はすべてを捨てて天国に旅立ってしまはれた。九大時代の小島先生は国文学会の酒宴の折などで、即興の狂言を好んで自演され、自ら太郎冠者をもって任じてをられた。天国では、大名に擬せられた高木先生は太郎冠者の近づいてくるのをみられて「念のう早かった」と迎へられ、早速酒杯を押し付けられた太郎冠者が畏まってそれを受けてをられるさまを私は思ひ浮かべてゐる。助手時代の私は、時にはなぜ叱られてゐるのか分からない叱られ方を先生からされたこともあった。学生時代の私たちは延長授業が嫌だった。小島先生といふ方は、私のおやぢのような反面教師でもあったわけである。

—名古屋女子大学教授—